



136号

2008/9/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町 1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「4人乗り」 買い物が終わりに、家族は家路を急ぐ。スラバヤのクプトウランマーケットにて by Wulung AnggaraHanandita (撮影地：ジャワ島)

‘わんりい’136号の主な目次

北京雑感その(27)「北京のマラソンコース」……………2
私の調べた四字熟語(25)「空中楼阁」……………3
中国を読む(54)「二つの母国に生きて」……………3
すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮(5)……………4
媛媛讲故事(6)「黄帝と龍」……………6
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より……………6
四姑娘山・写真便り(11)「アラスカ・ブラウンベア」…7
内モンゴル・草原の広がり(中)……………8
私の四川省一人旅(17) 垂丁IV……………10
スリランカ紹介(21)「スリランカの恋人たちと日傘」…12
アフリカとの出会い(27)……………13
チャリティコンサート【報告】……………14
‘わんりい’掲示板Ⅰ……………15
‘わんりい’掲示板Ⅱ……………16

♪♪「中国語で歌おう!会」・9月の歌 ♪♪

「香港之夜」詞：林煌坤 曲：井上忠夫

(テレサ・テンの人気ナンバーを復習します)

於：まちなだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
小田急線南口徒歩5分町田東急裏 109 ファッションビル7F

9月26日(金) 19:00～20:30

指導：趙鳳英^{zhào fèng yīng} (中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

●「中国語で歌おう!会」 於：まちなだ中央公民館
毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)
19:00～20:30 会費(月1回):1,500円

★体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局へお問合せ下さい。



8月17日の日曜日は、朝からテレビの前で、オリンピックのマラソン観戦を決め込みました。レース結果は、期待外れでしたが、「勝敗は時の運」と納得すべきものなのでしょう。

スポーツの実況中継には余り興味の無い私ですが、国内で行われるマラソンや駅伝は、スタートからゴールまで見続けて、家族にはよく笑われます。それでも、一所懸命走る選手の姿を見るのが好きで、駅伝ともなると、アクシデントに見舞われた選手の、チームに対する思いなども感じられて、全コース目が離せません。また、レースが行われている場所に行ったことがなくても、放送での紹介や、沿道の人々の応援を見ていると、街の雰囲気まで感じられるようで、そこに行ったような気になったりもして楽しめます。

今回の北京市内のコースは、よくバスで通ったり、テクテク歩いたりした地域なので、なおさら懐かしく、是非見たいと思ったのでした。ところが、今回の北京マラソンの中継は共通映像とかで、他社(国)が撮影した映像しか使えないため、国内でのレース実況とは全然違って、コースの具体的な紹介は無く、地域の映像も余り見られませんでした。

実況の(と言っても、当然、映像を見ながらの放送ですが)アナウンサーが話す道路の名前を聞きながら、地図に印を付けました。映像を見ただけでそこがどこか分かるのは、ほんの5,6箇所しかありませんでした。後は、アナウンサーの説明を聞きながら、ここを曲って、あそこを通過と、地図の上とテレビの画面を見比べていたので、懐かしむ余裕などありませんでした。

おまけに、アナウンサーが「かいている」と紹介した時は、思わず、「え、そんな道あったかしら」と思ってしまいました。私が予想していた道とは違う道から北京大学へ入ったので、「かいている」が直ぐには分からず、危うく迷子になるところでした。この道は、「海淀路」のことで、「hǎidiàn lù(ハイディエンルー)」と呼び習わしているものです。

私の中国語は、発音が不正確、四声はデタラメで、なかなか通じないのですが、バスに乗った時は下手でも中国語で言わないと切符も切ってもらえませんか、中国語の呼び名になれているので、一瞬「かいている」とはどこだろうと思ってしまったのでした。

北京大学へは、西門から入って東門に抜けたのですが、この東門は、3年ほど前のものとは違います。以前の東門を私は知りませんでした。中関村北大街の東側にある

北京大学は、3年前まで、レンガ塀の向こう側にあり、道端には、塀に寄りかかるように小さな家が立ち並んでいました。それが2年前に行ってみると、その家が取り壊され、工事の囲いがしてありました。そして昨年、大通りに面して、すっきりした大学の門が出来ました。

それで、私が「北京大学に東門が出来た」と言いましたら、中国人の友人が、「東門は前からあった」といって地図を見せてくれたのですが、何とその地図は、道路そのものが現在のものとは違っていました。以前は、中関村北大街すらなかったのです。四環状線の工事と同時に、北京大学の校地も整備したようで、私が気付かなかったのは、既に四環工事の囲いの中に入っていたためのものでした。10年前のこの辺りを良くご存知の方が、「北京大学の東門を出て北上し…」という放送を聴いても、イメージがわからないのではないかと思います。

因みに、昨年、私は北京市街地図を買おうと思って、本屋さんを何軒も回ったのですが、種類が極端に少なく、満足なものがありませんでした。どうしたのか不思議でしたが、市内のあちこちで道路が新設されて、以前と様子が変わっているので、少し落ち着くまで地図の発行を控えているのだらうと、勝手に想像しています。郊外のこの辺りのみならず、中心街の前門周辺までも新しい道路が出来てすっかり変わっていますから、これからの市内散歩には、新しい地図が絶対必要です。

その後、レースは清華大学の西門から入って東門へ抜けたようですが、テレビでは「南門を出た」と言っていました。確かに、東へ走ってから南へ曲がり、そのまま門を出て行ったので、南門と思われたのでしょうか、その後の道筋や、門周辺の様子から見て、あの門は、清華大学の正門として最近周辺整備が終わった東門だと思われます。南門は、もう少し西よりにありますが、雰囲気が違います。

沿道の応援は随分制限されていたようです。清華大学構内は、応援には絶好の場所と思ったのですが、沿道での応援が許可されなかったようです。大学構内に住む友人と、「応援の様子がテレビに写ったら楽しいから、目立つように応援してね」と話していたのですが、応援は、交差点で水路を隔ててのみ可能だったようで、テレビ上で友人との再会は果たせませんでした。

それにしても、マラソン選手は随分速く走るものですね。

私が40分以上かけて歩いた平安里路の距離を、10分足らずで走り抜けて行きました。

この熟語は日常的にさほど頻繁には使われていないようですが、辞書には日本語、中国語とも四字熟語(成語)としてそれぞれ次のように掲載されています。

三省堂現代国語辞典では、「空中楼阁：空中に建てる建物のようによりどころがなく実現できないものごと」。

小学館日中辞典では、「空中楼阁：架空の事物」。

また中国北京 光明日報出版社発行の「中華成語故事」では、「空中楼阁：この成語のもともとの意味は、空中にぶら下がった楼阁のこと。後に実際の理論とかけ離れた計画または虚構の物を指すようになった」。

この成語の出自は「百喻経ひやくゆききょう注)、三重楼阁」です。

昔、一人の資産家が居りました。彼は大金持ちでしたが、少し愚鈍でしたので、人々はいつも彼を嘲笑していました。

ある日、彼はもう一人の資産家を訪問し、その資産家が建てたばかりの三層の真新しい楼阁を見ました。その建物が高く、大きく、輝いているので非常に羨ましくなりました。そして心の中でつぶやきました。「自分と彼は

同じように金持ちだ、彼はこんなに綺麗な楼阁を持っているのに、自分は持っていない、これではとても話にならない。自分もこのような楼阁が欲しいものだ。」

次の日、彼は大工職人を訪ねて「あなた達は、隣村の資産家の楼阁は誰が建てたのか知っていますか?」と訊きました。すると職人たちは「あの家は私たちが建てたんですよ。」と言いました。それを聞いた資産家は大変喜んで「それは好都合だ、あなたたちでそのままそっくり同じ楼阁を私のために建てて下さいよ。」と言いました。職人たちは彼の申しつけ通り、早速家造りを始めました。

何日か過ぎて、資産家は現地の視察に行きました。彼は工事中の建物のあちこちを長い間見てまわりましたが、どうも合点がいかず、職人たちに問いました。「あなたたち、これは何を造っているのですか?」

すると職人たちは「私たちはあなたのお申しつけの通りの三層の楼阁を造っているところですよ」と答えました。資産家は慌てて言いました。「違う、違う、私はあなたたちに三階の建物だけを造ることを頼んだのです。私は一番上の階だけが欲しいのです。下の二つの階は要りませんからすぐ取り壊して下さい」

職人たちはそれを聞くと、ワッハッハッと大笑いして言いました。「一番上の階だけを造るなんて私たちには出来ません。それともあなたが自分でやってみますか!」

注) 百喻経：インドの法話集。普通のお経は難解であるが、これは全部、寓話(警え話)で構成されている面白いお経。

中国を読む(54)

『二つの母国に生きて』

ドナルド・キーン著(朝日選書)

出版社に勤めていたとき、学会に本を売りに行くという仕事があった。ある学会で、講演を終えたドナルド・キーン氏がやってきた。そこにいる人たちがすべてが、彼に注目した。氏はゆっくりと本を見始め、私の前にも来、本をさっと見たが、一冊も手に取ることなく隣の出版社の机に移っていった。そして、結局何も買わずに去っていった。今にして思えば、その場の関心が一気に自分へ寄せられているなかで、本など買えっこない。彼は本を買えなかったが、一般人の私は帰り道の書店でキーン氏の本を買った。

説明の必要もないが、キーン氏はアメリカ人の日本文学研究者だ。外国の研究者の面白さは、自国の文化と比較しながら日本人の国民性を指摘できること。例えばこんな感じ。

「日本人もアメリカ人も祖国愛が強い。しかし、その祖国愛の裏にある祖国観はかなり違う。多くの日本人の常識によると、日本人は世界で全くユニークな国民であり、他国と根本的に違うから、日本人でなければ日本の風土や文化を理解することは不可能であろう

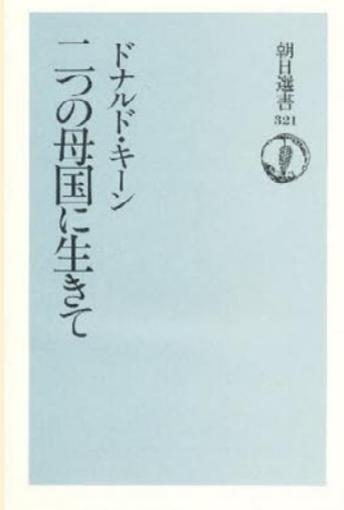
と考え、アメリカ人の常識では、アメリカの文化は普遍的なものなので、他国人はそれを理解して同調するはずであると考える。」(誤解のないように書き添えると、両方の祖国観は間違っているとのこと。)

この本を読んでいて感じるの、キーン氏の日本への愛情だ。日本人以上に日本の良さを知っている研究者なのだ。「知る」ということを重ねていくと、「好き」に繋がっていくのかもしれない。

というのも、夏前には、なにかとマイナス面がメディアに露出してた中国。オリンピックの開会式以後、なんとなくプラスな報道に傾きつつある気がする。オリンピックというイベントをきっかけに、今まで報道されなかった細かな部分が見えてくるからでは。例えば、インタビューで日中の国旗を持って入場した日本人選手に「感動した」と答える中国の一般市民に、

私も同調して感動している。中国を好きでも嫌いでもなかった人が、そんなお隣の国の一端を「知る」ことで、「好き」に近づいたら、なんだか温かい。

(真中智子)



すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 岩田温子 訳
第5回 意気盛んな中期の作品

高鳳蓮さんの中期の作品は90年代中頃から後期のものを指します。

この時期、高家では子供たちが成人し、老人たちは亡くなり、経済的には以前よりだいぶ良くなって来ました。物事をじっくりと考え、剪纸の仕事に専念する時間のゆとりが大幅に増えてきました。彼女の剪纸の構想は幅広くなり、表現されている内容はいつそう明確になりました。

高鳳蓮さんの剪纸作品は各種の展覧会に出展され賞賛を浴びることがたえませんでした。テレビ局や新聞などのメディアは民間芸術の根源を探ろうと、レンズや視線を高鳳蓮さんの上にも集めるようになり、その名声は陕北の大地の上にゆっくりと昇っていったのです。

当時、民間芸術の故郷No.1として認定されていた安塞県ではそれらの名手である老人たちが相次いでこの世を去り、次世代の一部の人たちは進取の精神が無く模倣にこだわり、民間芸術の市場は玉石混淆の複製品が溢れました。作品はよく売れ、そのおかげで沢山の作家たちが貧困から抜け出て豊かになりましたが、民間芸術本来の味わいや形はすっかり失われてしまいました。このため民間芸術研究者たちの安塞県に対する興味が失われて行ったまさにその時、延川にいる高鳳蓮さんが新たな目標と定められました。

高鳳蓮さんの剪纸作品の最大の特徴は、図柄の殆どの動物、人物の形が現実の形から抜け出て、“大まかな形は似ている”のですが、しかしよく見れば全てが異なるものの組み合わせで成り立っていることです。

また高鳳蓮さんの作品の目の表現は、目は丸い点で目玉を、目の周りは魚の形で、眉毛は鋸の歯のようにするというような従来のような決まったやり方ではなく、二本の弧線や花に似た模様を取って代わられたことが判ります。高鳳蓮さんは「人のまつげはきらきらとしていてまるで花の蕾のようだ。目を花の形にするとまるで絵のように綺麗になる」といいます。ですから高鳳蓮さんの剪纸の中では男性の目は牡丹の花の模様で、女性は蓮の花の模様で剪られていることが多く見られます。牡丹は富貴の代表であり、蓮花は純潔をあらわしています。

彼女は龍王の剪纸のなかでその二つの目を二匹の小さな龍で表現しました。両腕、両足、両耳さえも龍の装飾をほどこしました。龍王本体も含めて合せて9匹もの龍になります。9という数字は民間では天の定めとされており、何事も不可能なものは無いという龍王の神霊の象徴になります。人々は龍王を祭り、龍王に従うことで初めて風も雨も順調になり、五穀豊穡が約束され、国と民は安泰になり、家族は安楽に日々を送ることができます。こ



龍王 90年代後期

んな風に90年代中頃の高鳳蓮さんの剪纸はいつそう個人的になり更に成熟してゆきました。

主要な作品は遙か大昔の神話や民間伝説から身近諸事に至るまでますます幅広く題材にしています。例えば〈蛇が雀を飲む〉、〈龍王〉、〈二十四孝〉、〈二人の老人〉、〈黄河を渡る〉など、いずれも彼女が伝え聞いたことや自身で経験したことなどを表現し、その作品には更に大胆さ、奔放さ、人情味が加わりました。さらに、研究者のヒントの下に自然界や神からの啓示の象徴として「卍」の符号を装飾に使うようになりました。

創作意欲が元気いっぱい溢れた高鳳蓮さんの作品に風格が加わり、制作に当たっては子供たちの協力もあって大きな作品が剪られるようになり、作品数も増え、中国伝統の剪纸の分野ではだんだんに全国にまで名を馳せた地位を築くようになったのです。この十年来殆ど全国剪纸大展の全ての最高賞を独占しました。

例えば：

- 1989年 第一回延安地区テレビ剪纸コンテスト一等。
- 1995年 北京第4回世界婦女大会期間中、中央美術院陳列館にて展覧。このときの多数の剪纸と布堆画(アップリケ)は館に收藏された。

- 1996年 多数の布堆画が中国美術館に収蔵。
- 2000年 北京中国美術館で開催された“中国剪纸世紀回顧展”で特等賞。作品は中国美術館に収蔵。
- 2001年 山東省威海で開催された“中国民俗風情剪纸芸術展”で金賞。
- 2002年 北京革命博物館開催の“華夏風韻剪纸芸術展”で金賞。

数年来、多くのメディアが彼女を特集した報道をおこないました。現在は、中央テレビ局の番組“夕陽紅”のタイトルの場面で毎日高鳳蓮さんが紙を剪るカットがあらわれます。彼女は手の中の剪纸を持ち上げ、テレビを見ている観衆に対して美しく、にっこりと笑いかけます、中国の数億の働く女性の代表の姿です。彼女の名声は高まり、それと同時に作品の値段も急激に高騰しました。

高鳳蓮さんがこのように民間芸術の最高峰の地位に達することが出来たのには、現在中国民間芸術研究の分野での古参の研究者・靳之林先生の、一方ならぬ力添えがあったことも否定できません。これまで彼女が作品を送った各回の展覧会で、先生は多数の意見を押しやり最高賞の冠を高鳳蓮さんの頭の上に載せました。先生は剪纸芸術に深くのめりこむこと40数年、延安地区に13年も住んだ経歴もあり、陝北の風俗、風土をこよなく愛し、理解しています。

先生は、文字を全く知らない陝北の老婆の潜在意識の中に太古からの息遣いが細々ながら伝わってきていることに感動し、高鳳蓮さんが作品を通して天や地や太古からの便りの代弁者であると高く評価しています。そして、どんな名誉や名声が高鳳蓮さんの上にあろうとも、彼の黄土の僻地で、夫と共に、家族を守り、痩せた土地を耕し、家畜の世話をし、厳しい家計の遣り繰りをしながらしっかり暮らしてゆく姿にこそ、彼女の芸術の源があると述べています。



人々 90年代後期



卍のある動物の図柄 90年代前期～後期

大昔、^{xuānyuán}軒轅と言う英雄がいました。軒轅氏は戦神の^{chí yóu}蚩尤と激しい戦いをし、終には勝利を挙げて、三つの大部落と七十二の小部落を治める天下初めての統一国家を作りました。それが中国史の開祖として名高い黄帝です。

天下統一を果たした黄帝は、新しいトーテムを決めなければと考えました。その頃、各部落はそれぞれのトーテムを持っていました。

そんな訳で黄帝は「新しいトーテムは何がよいか」と大臣たちに訊きました。大臣たちは「天下統一を果たしたのは黄帝様の功德によるものなので黄帝様自らが扱った、もともとの部落のものを使えば良い」と言い

ました。黄帝は「各部落が私を国の君主として認めてくれたのだから、民衆の期待に背いたり、独断で勝手に物事を決めてはいけない」と戒めました。そして各部落からの代表が、各自のトーテムを携えて黄帝のもとに集まり、一緒に新しいトーテムを決める会議を開くことにしました。

各部落で使われていたトーテムは百種類近くもありました。牛、羊、象、魚、鹿、蛇、鷹、豹、イノシシなどなど。大臣達は、さまざまな意見を述べなかなか決まりませんでした。黄帝も困りましたが、「必ず天下統一と団結を象徴するものを造ろう」と考え、トーテムを何にするか考えて寝食も忘れるほどでした。

或る嵐の夜、バケツをひっくり返したような激しい雨が降る中、天地を震わすような雷鳴が轟き、眩いばかりの稲光が暗い空に走りました。稲妻はこれまで見たこともないような奇妙な映像を空いっばに力強く描き、黄帝に強い衝撃を与えました。

翌日、黄帝は大臣達を集め、昨日の夜の光景を伝えると「各部落のトーテムの一部分を利用し、世界のどこにも見られない動物のトーテムを作れ」と命じました。

そして何日も掛けて終に、蛇の体、魚の鱗、馬の頭、鹿の角、イノシシの鼻、牛の舌、象の牙、鷹の爪、犬の尾をした動物が描がかけました。それはそれぞれ

の部落の象徴するトーテムの一部を使った、世界のどこにもみられない、威風堂々とした姿を持つトーテムの姿でした。まさに天下の「統一と団結」を象徴し、新しい国の強さを語っているようです。黄帝は楽しそうに呵呵と大声を上げて笑い、大臣達も満足し、天下の民が皆喜ぶトーテムが誕生しました。そして黄帝はこの動物に「龍」という名前を付けました。

以来、「龍」は、天に昇ったり、海に潜ったり、風を呼んだり、雨を降らせたり、自然界の森羅万象を司る神として、帝から庶民に至るまで畏敬される中華民族の吉祥と権威の象徴として崇められてきています。



yú qíng cán xīn
 松本杏花さんの俳句「余情残心」より

望月の語りかけたき近さかな

zhōngqiū hào yuè yuán
 中秋皓月圆

wú yù yǔ zhī xiāng pāntán
 吾欲与之相攀谈

jìn zài zhīchǐ jiān
 近在咫尺间

季语：中秋月，秋

赏析：我国唐代大诗人李白在《月下独酌》中吟道：“举杯邀明月，对影成三人”将自己的身影和月亮都拟人化了。此首俳句与之有相同之处，但不同的是，杏花女士擅长茶道，不饮酒。她只想与月亮近在咫尺，可以娓娓交谈。如此距离，当然不会出现身影。此句具有浓厚的浪漫色彩，在俳句中较为鲜见。

雑草もあるがまなる花野かな

lí lí zá shēng cǎo
 离离杂生草

hóng lǜ féishòu zìrán mào
 红绿肥瘦自然貌

huā yě gèng yāo ráo
 花野更妖娆

季语：花野，秋

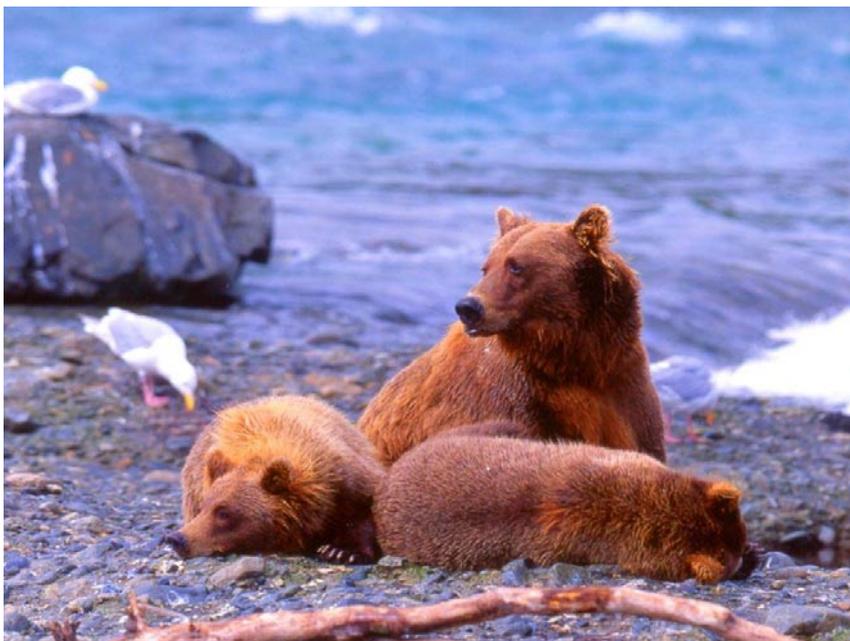
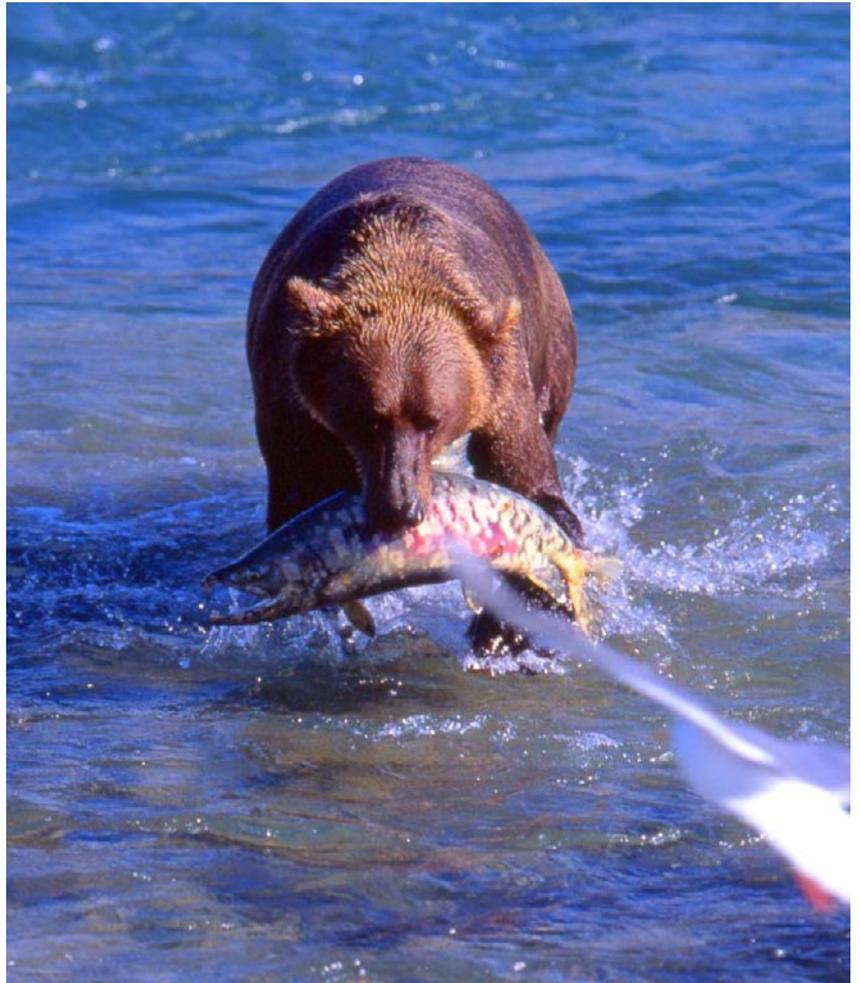
赏析：诗中的花野，是指花草盛开的原野。

秋来花木斑斓，作者对花草并茂的景观十分着意。当今，人工雕琢的风景太多，造成人们的审美疲劳。当看到杂草与鲜花并茂的自然景观时，不禁眼睛一亮，只缘这种风景日趋鲜见了。

雲が低く垂れ込めたクック湾上空を小型フロート機で西へ横断していた。高度を200mに落として有視界飛行しているが、それでも時々雲に入り周りが真白になる。やがて湾に鋭く切れ落ちるアラスカ半島東岸の山脈に行き当たり、進路を崖に沿って南に変えた。暫く飛行すると、海岸線を波で浸食された平坦な草地が見えて来た。広大なマクニール河口であった。

ここは遠浅の泥地なので満潮を狙わないと上陸できない。小型フロート機は海岸から突き出た細長い州へ乗り上げるように着水する。近くに駐在している自然保護官の迎えを受けてボートに乗り換え、監視小屋に近い海岸の草地へ上陸した。

この辺り100km四方に居る人は、2人の自然保護官と夏の間だけパーミットを取って訪れる10人前後のフォトグラファーだけだ。河口に自分でテントを張り、河を少し遡った所に在る熊の集まる滝まで重い写真器材を担いで1時間通い、撮影する。熊とニアミスする事が多いので、猟銃を持った自然保護官が同行して色々アドバイスしてくれるが、事が起きても熊を撃たない。ここで生きる優先権を持つのは熊なのだと思います。



夏の日午後、河に遡上して来た鮭を捕まえて、岸边に戻って来たクマオヤジ。

「クマさん、どうだい近頃の獲物は？」
「めっきり鮭が減ってクマツツもんだ！」



●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essay-title.html>

●大川さんのホームページはこちら
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvally.htm>

◎早朝登山

私はいつも早起きで、4時か5時には目覚めることが多い。旅行に行ったときも早起きで、朝食までの時間は退屈だ。何か生産的な特技でもあればよいのだが、宿の周りをうろつくのが常である。今回も同じで、宿舎の周りは山だから、朝飯前の山登りになった。

4時30分に山荘を出るとまだ薄暗く、ものははっきり見えない。誰もいないと思ったが、Sさんが朝の空気を吸っていた。ちょっと行ってきますと挨拶。とぼしい朝の光をたよりに山に向かった。やがて浅い谷を渡り、白い花をつけた灌木の斜面に取り付く。前日に山荘から観察して、このあたりから登ればよかろうと見当をつけた場所である。歩いて、日本の山と違うと感じたのは、地面の固さである。日本の山は、枯れ葉などの堆積物が厚く積もっているのが柔らかい。道を外して歩くと、地面に足跡が付く。しかし、ここでは草地のせいか堆積物は少なく、足跡はほとんど付かない。歩行中の靴底の感触は、硬さを感じた。

登山道は無いが、道無き山とはいえ、羊のけもの道がたくさん交叉していた。まだ芽吹いていない、トゲのある灌木がまばらにあり、その茂みにチリ紙のような物があちこちに引っかかっていた。よく見れば羊の^{にこ}毛である。羊どもが移動中に残した物だ。小さな流れを越えると梨のような白い花が朝日をあびてまぶしい。と、こんな調子で書いていたらなかなか山頂には着かないので、途中は省略。

山の傾斜は緩く、直登できるのでぐいぐい登った。まだ寝静まり返った山荘は足もとに小さくなり、空が広くなると、遠い山並みも地平線の内側に現れた。山荘から尾根の上方に見えた残雪が、今では近くにあった。汚れた雪を足で突つくと、意外やかなり硬いので、降雪後かなり時間がたって氷化した雪だった。

すでに勾配はなくなり、山頂の気配なのだが、ここが山頂と納得できる場所がない。「歩き方止め」のきっかけがな



山荘の前面に広がる放牧地の丘。樹木はほとんどシラカバのみである。左下の谷は高度が低いので草の伸びが早い。

いのでさらに進むと、広場のように平らな草原になってしまった。草原の端は鯨の背のような傾斜はあるが、サッカー場が三つ四つは取れそうな広さである。山荘からの標高差は約400m、推定高度1800m。まわりは一面の枯れ野原だ。

山頂のけじめを求めてなおも進むと、枯れ野の果てに竹箒の先端のような、ぼさぼさしたものが見えてきた。これこそ山頂のけじめに違いない、これで帰れるぞ。やがて「ぼさぼさ」の全体が現れると、岩くずを積み上げた祭壇のようなものが、鎮座していた。オボである。5時40分到着、山荘からちょうど1時間かかった。

実は山頂にオボがあるのは知っていた。それは以前この山に登頂した、「わりい植樹隊員」から聞いていたからである。「オボ」とは、小高い山や峠に石を積み重ねたもの。そこに土地の守り神が宿るとされる(ALE-Netより)。

ここのオボは、石積み小山の上に角材で檜を建て、鳥の巣のような小枝をの束をさし込んでいる。オボの周りには、カラの酒瓶が多数ころがっていて、地元民がここで酒盛りをするのだなとその時は思った。が、後でブルグッドさんから聞いたところでは、酒はすべて神に捧げて、地面に飲ませるとのこと。ああ、なんともつたいないことを…と思ったが、俗人のあかしか。このオボは「王爺敖包(王様のオボ)」という名前だと、ブルグッドさんに教えてもらった。

日本では、山頂は文字通り最高点なので、その場で360度の展望は珍しくない。だがモンゴルの山頂は原っぱの一点なので、遠景はともかく、麓は見えなかった。麓をのぞき込むためにはかなり移動して、草原のへりまで下り、やっと眼下に緑の草原を見下ろすことができた。盆地状の草原が微妙な階調の緑色に染まっている。遠くには緩やかに起伏する丘陵が地平線にとけ込んで、なかなかの絶景である。では反対側の風景は？山の反対側を見るためには、またまたかなりの距離を移動する必要がある。緩やかな登り坂、オボのそばを通過、眼下が見える場所まで下り、やっと反



早朝登山で行ったときの「王爺敖包(王様のオボ)」。このあたりで、一番高い山である。6月でもまだ芽吹いていない。



牧草地の丘の瓦礫地帯で見た背の低い名称不明の花。



2回目に登ったときの「王爺敖包」。これは隣の山から見たもので、写真中央上のわずかな突起がオボ。

対側の景色と対面。モンゴルでは山頂からの展望を得るにも、なかなか厄介なことである。

オボに背を向けて帰途についた。帰りは、下りなので足取り軽く、7時に山荘に着いてしまった。テラスでは起床した数人が、小鳥の毛繕いといった感じでコーヒーを飲んだり、歯を磨いたりしてたむろしていた。

2日後に前述の山には、別の登山口から回遊コースで登った（やはり早朝単独）。その同じ日に、朝食後皆さんと私としてはこの日2度目、今度は往復コースで登ったので、滞在中この山に3回も登った。Bさんに山の名を「図都府扎那山」1886mだと教えてもらった。

●山荘生活

山荘生活の基本は、午前中のハイキングで始まる。本命の目的地は、山荘2日目に私が早朝登山で登った「図都府扎那山」である。しかし私が下山してから、空模様が怪しくなったので朝食後、足慣らしでそばの小山に行った。

そこは標高差200m程度のいくつかの丘の連なりで、緩やかな起伏が波うつ地形である。麓にシラカバのまばらな



皆さんと登ったときの記念撮影。私だけ3回目の「王爺敖包」。

林があるが、大部分は貧相な草が全体を覆っている。羊の放牧地なので草が十分伸びるまえに、食べられてしまい草原は貧相なのである。ここは遊牧民の生活の場なのでこれは仕方がない。

丘の頂頭部は硬そうな岩石の列が露出し、これがやや荒涼とした景色をかもし出している。2人の羊飼いが付き添った羊の一群が丘の傾斜地を移動中だった。羊は自分の気分で勝手な行動は許されない。メイメイ鳴き声の合間に、羊飼いは、かん高い雄叫びと、長いムチを巧みに操って、羊群の進行方向を矯正する。羊飼いの運動量は生半可ではなく、さっきまで麓にいたかと思うと、今は山の頂を足早に突き進む。突然の驟雨でも、平然と仕事を続ける。激しい運動量のある労働だ。

ある時、麓のシラカバの小枝に、何かがぶら下がっていた。ハテ何かしらと近づくと、布で包んだ羊飼いの弁当であった。見つけやすさと、小動物に盗られぬ用心とで木の枝に縛るのだろう。できることなら中身を見たかった。

やがて、丘の頂上に着く。岩くずの間に見知らぬ青い花が咲いていた。羊が食べないのか、見のがしてしまったのか。日本に戻ってから、内モンゴルの同じ地域の写真をネットで見た。それは7月でなんと一面の花盛りではないか。貧相に見えた草原も、羊に食われるより早く成長するのだ。

(続く)



山荘前のテラスで日向ぼっこ。

母たちの仲間と、中国四川省にある大姑娘山(5,025m)に登った後一人残った私は、3年前に訪れた、四川省と雲南省の省境に近い、最後のシャングリラ・亜丁が忘れられず再びその地を訪れていた。(わんりい5月号より続く)

登るにつれて高度が上がり、呼吸はいよいよ苦しくなってくるが、「美しい湖が見たい」という目的を得た私は張り切っていた。

苦しければ苦しいほどその向こうにあるものの価値は増していくのだ。これは盛り上がりにはられない。しかし私ほど好奇心が旺盛でない他のメンバー達は、思いがけず始まってしまった酸素の薄い高地での、苦しい登山に徐々に士気を下げているようだった。そんな時私達の登っている道を上から下ってきた中国人の旅行者らしい一組の男女とすれ違った。

「你好! 頂上まで、あとどれくらいですか?」

私達がたずねると2時間くらいとの答えだ。

「ええ~!! あと2時間!?!」

疲労が限界に近づき始めていたやや年かさの一行は、この答えに思わず顔をこわばらせていた。元々登山をするなどという話は聞いておらず、ほんのハイキングのつもりで出かけてきたのだ。各自十分な食料や水なども持っていなかったところに、おりしもにわかには湧いてきた雲からは、時折パラッ、パラッと霧雨までパラつきはじめた。

ついに「私はこれ以上無理だからここで下山するわ」という声が上がリ、「それなら私も・・・」と、とうとう私以外の女性メンバーは、そこで全員登山を続行するのを断念してしまった。

しかし事態がそうになると、何故だか私は余計に張り切ってしまうのだ。

「私は行くよ!! 絶対湖が見たいから一人でも行く!!」

気をつけて行きなさいよ~!!との声を後ろに、「大丈夫、大丈夫~!!」と手を振り一人で山道を登り始めると、いくらも行かないうちに少し先を歩いていたセミプロカメラマンのKさんが「こりゃ、だめだあ~」と座り込んでいた。「カメラも水もカッパもあの坊主が持って行っちゃったし、もう無理だよお~」

そういえばKさんの荷物は、殆ど全部ポーターを勤めるチベット少年が背負っていたのだ。本来ならポーターは雇い主と共に歩くのが鉄則なのだろうが、臨時で雇われた少年にはそんなことまで思いおよばなかったのだろう。歩みの遅い日本人勢に合わせているのが面倒になっただけで、とっとと先に行ってしまったらしい。

ここでKさんも登山を断念してしまったので、日本人参加者組は私だけになってしまった。幸い先ほどの雲はすぐ

にどこかに流れ去ってしまい、天気は再び快晴だ。登るにつれてぬかるんだ土の道はいつしか岩の上を歩くような道に変わりはじめていた。片側は大きな岩壁が切り立ち、反対側は足を踏み外せば即サヨウナラの深い谷だ。足元からはゴウゴウと激しく水の流れる音が響いてくる。ゾクゾクしてきた。こういう場所を歩くのは嫌いじゃないぞ~。

途中岩壁の斜面を昨夜の雨水が流れ落ち、小さな滝状となっている岩場で足場を探しながら登らなければならないようなところもあったが、岩登りは子供の頃から大得意だ。ちょっとスリリングな登山の道のり自体は十分楽しみながら登っていたが、それにしても呼吸が苦しくてたまらない。既に4000メートルをゆうに超える高度になっているはずだ。1メートル登っては呼吸を整え、2メートル登っては休みながらヨロヨロと登っていると突然頭上の岩から「ホウッ!、ホウッ!」と叫び声が響いてきた。

見上げると十数メートル上の岩からチベット少年が笑顔で両手を振っている。「早くあがっておいでよ~!」と叫んでいるのが仕草でわかった。見晴らしの良いその場所でみんなが登ってくるのを待っていたらしい。「ヤッホ~!」手を振り返すと力を振り絞って彼のいる場所までできる限りのスピードで登った。

少年のいる岩まで登り着いた時には胸が張り裂けそうだった。心臓は早鐘のように打ち、しばらくは言葉を喋ることもできない。まるで1000メートル全力疾走した後のように、胸を押さえ犬のように口を開けたまま、いつまでもハアハアと荒い息を吐き続ける私に少年は困惑したような顔を向けていた。

「大丈夫?」

「だ、大丈夫だけど、ちょっと待ってえ~」

一息つくると少年と一緒に歩き始めた。

悔しいなあ~。全く下界の人間の身体は軟弱だ。私が胸を押さえヨロヨロしながら歩いているというのに、少年は5キロはあるだろうKさんのカメラ機材や荷物が詰まった大きなザックを背負ってタバコをふかし、鼻歌など歌いながらヒョイヒョイと弾むような足取りで岩を登っていくのだ。彼としては私を気遣いだいたい歩く速度を落としているのだろうが、とても同じペースでは登れない。何度も足を止めて息をついた。

チベット人の身体ってかっこいいなあ。。。もしこの土地で1年暮らしたら、私も彼らのような身体になれるのだろうか。少年は数メートル進む度に振り返って私が追いついてくるのを待っていてくれた。苦しいけど楽しい登山だった。

しばらく頑張っただけで登っているうちにある程度山に登りきったらしく、なだらかな道になったので少年と肩を並べて

歩いた。当時私の中国語は現在よりも拙く、彼とはあまり会話することもできなかったが、楽しい気分を共有する気持ちは通じ合っていて一緒に歩いているのが楽しかった。こんな下界から遥かに離れた場所で、昨日知り合ったばかりの異国の少年と二人きりで歩いているなんてなんだか不思議だ。

「湖は綺麗？」

私の問いに、少年は深く頷いた。

「到了～!!」

両手を広げて少年が叫んだ。

「え!?ここ!? 着いたの? 着いたの!? やった～!!」

目の前に聳えている岩山の氷河は手を伸ばせば届きそうだ。実際に岩山の斜面を少し登れば、この手で氷河に触ることもできそうに見えた。

「湖は!？」

数メートル進んだところで、少年の指差す方向を見た私は思わず息を呑んだ。それは私の想像を遥かに超えた、信じられないくらいに美しい美しい湖だったのだ。

「きーれーい!!!」

思わず日本語で叫んだ。

「綺麗! 綺麗! 綺麗～!!!」少年の肩をつかみ、激しく揺さぶりながら何回も叫んだ。

山の上にある美しい湖・・・、私が想像していたのは、いつかバイクで青森を走った時に見た十和田湖のような青い湖だった。シンとした静寂に包まれた深い藍の湖。なんとなくそんな風景を頭の中に浮かべて今まで歩いてきたのだが、目の前に現れたのは、キラキラと鮮やかな水色が複雑に重なり合い、まるで燐光を放っているかのように輝く宝石のような湖だったのだ。降り注ぐ太陽の光を浴びて水の表はさざ波をたてる度に色を変え、砕けたガラスのかけらが塗してあるかのように煌めいていた。

信じられない。こんな湖がこの世にあるなんて想像もしていなかった。

呆然と、ただ「綺麗～!!」という言葉繰り返す私を見て、少年は満足そうにしていた。彼らにとっては当たり前の自分達の土地が、こんなにも美しいということが誇らしく嬉しいのだろう。

湖の畔に並んで腰掛け景色を眺めながら、少年は何度も「綺麗?」「気に入った?」と尋ね、私は何度も「最高に綺麗」と答えた。言葉の足りない二人には、これ以上ないと思える美しい風景の前でそれ以上話すことは何も無かった。

しばし想像を超えた美しい風景に陶然としていた私だったが、ふと我に返るとある事に気がついた。

これは先程の秘密の花園にも負けなくらいロマンティックな状況なのではないか。

昨日出会って以来大好きになっていた利発でかわいい13歳のチベット少年と私の他には誰もいないこの美しい美しい風景の中で、並んで腰掛けている今の状況だって花園の二人に負けなくらい映画の中の一コマの様じゃないか～。

ただ、ヒロインとなるべく女優の私が少女というより少年の母親役を務めたほうが似合いの年増であることと、身にまとっているのが可愛らしいチベット服ではなく薄汚れた登山服であるということが、その場を著しくロマンティックからかけ離れたものにしていった。私の人生史上これ以上は無いという最高のロケーションに恵まれながら、なんと無念な事だろう。

ああ!! 5分でいいから私もチベットの少女になりた～い!!

美しい風景に深く感動しながらも、ひそかに場違いな望みをチラッと胸に浮かべていた私なのだった。 (続く)



チベットの少年と訪れた'宝石の湖'

今回はスリランカの恋人達の話です。恋人達といってもスリランカ国内では自由に恋愛をして恋人を持つ事が出来る雰囲気は薄く、コロンボに住んでいる若者、大学生の一部、留学経験者達は恋愛という概念を持っていますが、コロンボ以外の場所に住んでいる大部分の若者にとっては恋愛や1対1のデートは夢の様な話です。

また、結婚を前提としない恋愛も一般的ではありませんから、恋愛をするにしても男女とも相手を選ぶのに慎重になっている様です。特に地方では結婚相手は自分で見つけるのではなくて、親が決めるものだという考えが中心ですから、自由な恋愛で伴侶を捜すなんて許される訳がありません。もちろんタブーに挑戦する若者もいますが、良い結果は得られない様です。

無理矢理に双方の親によって引き離されるだけならまだ良い方です。引き離された後でも隠れて付き合ったりすると、親戚一同から絶縁されてしまいます。スリランカでは親戚との付き合いが濃厚ですから、親戚付き合い無しに新しい家庭を作ると言うことは難しいです。

駆け落ちをするカップルも多い様ですが、国土面積が北海道の80%程度しかない上に、人間の住めないジャングル等も多いため、駆け落ち先は限られています。日本の様に人知れずに潜り込める様な大都会もありません。生活する為に必要なお金を得る機会も親戚縁者のコネ無しに捜すのは難しいことです。

更にスリランカでは親戚だけでなく友人関係、知人関係も濃厚なので、何処の土地に行ってもも誰かしら知り合いがいて直ぐに見つかって連れ戻されてしまいます。最悪の悲惨な結果として心中してしまう事もあり、新聞記事で見かける事も度々あります。

コロンボの若者が進んでいると言っても、まだまだ初々しいものです。ショッピングセンターのフードコートのような場所で若者達の集団デートをよく見かけますが、観察していると男は男同士、女は女同士で話をして盛り上がっています。ソフトドリンク一杯で何時間も粘っているのですが、カップルが生まれる気配はありません。

何処の国でも同じですが、男性は女性の気を引こうと過度なパフォーマンスをしているし、女性も何人かで男性の顔を盗み見しながらヒソヒソ話をしています。大概の場合、女性達の視線は一人の男性に集中しています、でもそれ以上にはなかなか発展していきません。

さて、首尾よくカップルが誕生すると次に問題になるのは何処でデートをするかです。ショッピングセンター

の中をグルグル歩き回ったり、映画に行ったりするのは万国共通です。僕の住んでいた処から直ぐそばの、ヴィハーラ・マハー・デーウィ公園は近くにあるコロンボ大学の学生達のデートスポットです。

此処は英国の植民地時代に作られたクイーン・ビクトリア公園が独立後に名称変更された公園で、紀元前に在位していたシンハラ王朝の女帝の名前が付けられています。植民地時代にシナモン栽培が行われた地域にあるためにシナモンパークとも呼ばれ、今でも公園は広々としていて、樹木が生い茂り、花壇では一年中花が咲き乱れています。

恋人達は、日本の恋人達のように腕を絡ませたり、手を繋ぐようなことは滅多にしません。微妙な距離を保って並んで公園内を歩き廻ります。ただ日本と違うのは、木陰等で一休みする時に日傘が活躍する事でしょう。

恋人達は暑いからなのか頻りに木陰で休みます。こんな時にどのように日傘が活躍するかと言うと、木陰に入ると通路に背を向ける格好でベンチや芝生に腰を下ろします。そして日陰であるにも拘わらず広げられた日傘の下にカップルが上半身を隠すようにして入り込みます。自分達だけの空間を確保しようとしているのでしょうか。さすがに正面に回りこんで確認した事はありますが、人目を忍んでする事が何かあると思われれます。

最近の日本では人前でも堂々で行われている様ですがスリランカでは恥ずかしげに行われていて可愛いです。僕はこの方が好きですね。このスタイルはスリランカの恋人達のスタンダードです。

前回紹介したゴルフフェースグリーンで、インド洋に沈む夕日を見物する為に波打ち際の最先端にある石段の上に陣取っている恋人達も、夕日は自分達の正面側にあると云うのに日傘を背負うようにしてじっと夕日を見つめています。そして日傘の位置が少し変わって上半身が見えなくなったりします。スリランカ南部のゴールにある、世界遺産に登録されているフォート(砦)でも、砲台の跡や石壁のくぼみ等で日傘を差しているカップルをよく見かけます。日除けだけでなく、この様な用途からも日傘はデートの必需品らしいです。

外国人観光客が訪問する遺跡や名所、宿泊する高級ホテルは、スリランカの新婚さんにとっては一生に一度の新婚旅行のメッカになっています。このような場所には日傘のカップルが多くいるので、あまりジロジロ見ないで、どうか温かい目で見てあげてください。

アフリカとの出会い (27) 西ケニア・キスムへの旅

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

ナイロビから西に向かってウガンダとの国境近くの地域を「西ケニア」と呼ぶ。車で7～8時間、飛行機で2時間弱、国内旅行とは思えないほどの移動時間の長さだ。

当時手伝いをしていたJICA専門家の仕事で、たくさんのセメントや建築資材をナイロビから西ケニアのキスムまでトラックで運ぶことになった。

4トントラックに荷物を乗せ、ナイロビを朝10時頃出発。運転手と専門家の助手をしているアレngoさんと、3人で一路キスムを目指した。ナイロビから陸路で移動してみるとケニアのいろいろな景色が楽しめる。国立公園、紅茶畑、湖、大地溝帯といろいろな表情をケニアは持っていることが改めて分かった。

ナイロビでは、52民族が入り混じっているが、ナイロビを離れるとそれぞれの民族固有の村々が存在している。農耕民族、狩猟民族など生活の違いも見える。どんどん走って行くと車の数がぐっと少なくなる。途中、村々に着くと、すごい勢いで人が車を取り囲んでくる。

「とれたてのジャガイモだよ」

「工場から直送の紅茶だよ」

「手作りの民芸品だよ」

と土地それぞれの特産物を勧める。

運転手と助手は買いたいものがあると、「エツコ、隠れて」と言う。私がいると外国人値段になってしまうらしい。例えば、バケツ一杯のジャガイモが600円の相場だとすると、私がいるだけで、1000円になるらしい。しかも、私が買うと言い出した時は、1500円位になる。それにしてもバケツ一杯でその値段だ。私にしてみたら安い。しかし、現地の物価を考えるとそれでは高いということになる。

子供が近づいてきては、「^{ムズング} muzungu、^{ハバリ} habari?」と言ってくる。Muzunguとは、白人とか外国人とかいう意味で、habariは元気ですかという意味だ。外国人が珍しい彼らは、よく握手を求めてくる。有名でもないのに、何十人に握手を求められると不思議な気分になる。

車窓越しに見るたくさんの美しい景色。中でも、ナイロビから2時間くらいの「大地溝帯」の迫力と美しさは息を呑んだ。その昔、大陸がそれぞれに離れて行くときの衝撃で大地が裂けたとされる「大地溝帯」が自分の眼下に広がっている。その大きさ。広さ。圧倒的な存在感。そのすぐそばを時速100km以上で走って行く車。怖い～。

次は^{ケリチョウ}kerichoというケニアでも有数の紅茶の産地。日本でいうと静岡みたいなところである。特徴的なのは、今でもイギリスの農園所有者が経営しているところが多いことだ。ケニア人を雇って、広い農場を経営している。もちろん、日本でも有名な^{リフトン}Liptonもここに農場を持っている。紅茶畑の広大な眺め、きらきら光る太陽、優しい風、

その昔ここに移り住んだイギリス人入植者の気持ちはよく分かる。景色も、気候も最高だった。とある農場が経営するTEA FARMに入ってお茶を飲んでみた。ロンドンなどで体験するティーセレモニーも出来るのだ。お客さんはヨーロッパからの観光客がほとんどで、きれいな器に入った紅茶を啜っている。全くケニアではないみたいな雰囲気だ。美しい音楽が流れ、会話も弾み、優雅な時が流れていた。植民地だった頃の名残というよりも今だに続いている農園での植民地主義なのかもしれない。

夕方、西ケニアの中心地キスムに到着する。まずは、今夜の宿さがし。なるべく安いところを探して、一泊1500円位のところを発見した。食堂、ディスコが併設された、まず外国人向けではなさそうな感じの所だ。しかし、私はナイロビに帰ってからここに泊まったことを後悔する。理由はそこでもらったお土産が原因だ。

キスムは、ビクトリア湖という湖を望む湖畔の町。ルオ一族という民族の本拠地である。言葉もルオ一語。市場を覗くと魚をよく食べる民族であることが分かる。そして暑い。熱帯特有の暑さである。ビクトリア湖で獲れる代表的な魚ナイルパーチ(すずき)は空揚げにして、トマトのスープと一緒に、トウモロコシを練ったウガリという主食で食べる。とってもおいしかった。その夜は湖畔やマーケットをうろうろし、ホテルへ戻った。ホテルの窓がキッチンと閉まらないことが気にはなったが、長旅の疲れて熟睡した。

次の日の朝から2、3日かけて、セメントなどをプロジェクト地へ届ける。無事終えて帰路につく。空っぽになったトラックの荷台。来た道に戻る。沿道からよく手が挙がる。「荷物をナイロビまで運んで下さい」という合図なのだ。野菜、ヤギ、紅茶、豆などなど。そして夕闇が迫る頃、ナイロビのとあるマーケットに到着。明日の朝市には十分間に合う。こうして運転手は、荷物を運んだ帰りにはちょっとしたおこずかいを手に入れ、そのお金で焼肉とビールをおごってくれた。

そしてちょうど一週間後、私はマラリヤに罹った。潜伏期間1週間を経て、熱さと寒さが同時に来るという生まれて初めての病気になった。その時に飲んだ薬で一時的に耳も聞こえなくなった。幸い3、4日で回復したが、とんでもないお土産だった。自己管理の甘さとしかしいようがない。以来、日本の蚊取り線香、蚊帳は旅のお供として持っていく。

ルオ一族の運転手に「マラリヤになったよ」と報告すると、「僕らにとっては風邪みたいなものだからね。そんなのニュースじゃないよ。」と笑っていた。

ルオ一族以外のケニア人は、西ケニアに行くときはマラリヤには気をつけるようにしているとのことである。

コンサートの収益金と‘わんりい’に寄せられた義援金を合せ、50万円を現地へ

或る日突然起こった信じられないほどの大規模な四川地震。新聞やテレビで連日報道された、被害の大きさと被災地の悲惨な様子に、中国と長く関わって活動してきた‘わんりい’として、たとえ大きな支援はできなくとも何かをせずにはいられない気持ちになりました。そしてそんな気持ちを、多くの温かな心が後押しをしてくださりました。

‘わんりい’として思いつくのは支援のための“チャリティコンサート”。開催に当たっては即答で、「やりましょう！自分たちの故国で起こった大災害に私たちも胸を痛めています。」といてくださった出演者の皆さんをはじめ、多くの方々が力を貸してくださいました。収益金は全てとはいっても200席で満席の小さな会場。いかほどの義援金を作れるかという懸念はありましたが、コンサートには参加できないからと義援金をお送りくださった方々も多数あり、結果、当初の目的額の50万円を現地に贈る事ができました。主催の‘わんりい’として厚くお礼を申し上げます。

その後、日隆がある四川省小金県は、江西省政府による地震被害復旧支援対象(上海のような特別市や省の政府が、地震被害に遭った四川省の市や県を一対一に支援対象とする)となり、日隆は小金県政府の指導の下に、その支援金によって町ぐるみ、土地利用と建築規格の見直しがなされ全面的に整備されることになりました。大川健三氏の報告では、その後の余震のため家屋への被害が更に増大し、ほぼ村全域家屋で壁などが崩れたそうです。しかし、場合によっては区画整理もされて移住を余儀なくされる可能性もあり、民家は基本的には来年になって政府から支給される上記復旧支援金で修理されるとのことです。

以上のような事情の変化により義援金の使い道につきまして、現地で活躍の大川健三氏が、義援金送付先の日隆長坪村の村長である明亮氏と話し合いました。結果、現在最も必要とされ、支援の手が行き届かないのは家庭の備品であり、民家の修理が来年に廻されるため、夏でも時には暖房の必要なこともある、標高3,200mの地域で、寒さの厳しい長い冬を越すために各家庭では新たな暖房器財が必要とのこと、検討の結果、村人の皆さんの強い希望もあり、大川氏の元に寄せられた義援金と合せ、日隆・長坪村277戸の家庭の内、家族で住む270世帯へ大小2枚、一人で住む

四川大地震復興支援コンサート中国民族音楽の夕べ【決算書】

	摘要	金額	備考
収入	チケット	510,000	2500円×204席
	義援金	185,263	会場カンパ、写真集売り上げを含む
	実行委員会	11,000	弁当代として
	合計	706,263	
支出	出演謝礼 ^(*)	120,000	4名
	会場費	19,500	ホール昼・夜、和室・夜
	出演者贈呈花束	10,000	4束
	食費	17,039	夕弁当、お茶・紙コップ
	手数料	5,000	委託チケット取り扱い手数料
	印刷	13,954	PCインク代など
	通信	2,500	切手、宅急便など
	消耗品	5,296	チラシ用紙、封筒
	駐車代	1,500	7/2、7/24
	楽器運搬	5,000	ガソリン代
	義援金送付料	5,000	中国銀行
	雑費	1,474	交通費補助など
合計	206,263		

注*) 出演謝礼は、出演料ではなくコンサート協力への謝礼です。
 ● 706,263円(収入合計) - 206,263円〔支出合計〕円 = 500,000円

7世帯へ小1枚の電気毛布を贈ることにいたしました。

電気毛布を贈ることにつきましては、電気毛布の品質や電力事情などが‘わんりい’内で問われ、電気毛布ではない普通の毛布の方がよいのではないかとの意見もありました。が、現地からの回答で、長坪村は100%水力発電で自前の発電をしており、今回の地震でも村の発電は速やかに回復できたこと、電気毛布の消費電力は小さいので、仮に全村で2枚ずつの電気毛布を使用しても消費電力に特に影響がないこと、品質についてはメーカー側に全面的に責任を持ってもらうとのことで現地の希望に添うことにしました。

冬の朝は屋外で、マイナス15℃位に冷え込む現地で、特に今年は家が一部壊れた状態で冬を越さなければならぬ事情もあります。当初に予定の家屋修復用コンクリート購入費補助とは異なった支援物資になりますが、これまでも、そして今後も日本人が多く訪れるはずの日隆・長坪村です。電気毛布の暖かさに日本人の温かな気持ちを重ねてもらえれば、尚一層支援の意義も増すのではないかと考えております。

尚、最後になりましたが、コンサートは、出演者の皆様の心のこもった演奏や歌で、来場の皆様から沢山の感動が寄せられました。

(田井記)

平成20年度(第63回)文化庁芸術祭主催公演 アジアオーケストラウィーク <http://www.orchestra.or.jp/aow2008/index.html>

沸き立つ音楽を聴く! アジアをつなぐ三夜

10月2日(木) 四川交響楽団(中国) ●19:00開演

△指揮:唐青石(タン・チンシ) ヴァイオリン:陳曦(チェン・シ)

10月3日(金) ホーチミン市交響楽団(ベトナム) ●19:00開演

△指揮:チャン・ヴォン・タック ヴァイオリン:グエン・ビック・チャ

10月4日(土) プサン・フィルハーモニー交響楽団(韓国) ●18:00開演

△指揮:アレクダンドル・アニシモフ ヴァイオリン:デニス・キム

於:東京オペラシティコンサートホール(〒163-1403 東京都新宿区西新宿3-20-2)

各1回券:S席3,000円 A席2,000円 B席1,000円 3公演セット券 S席7,000円 A席5,000円

10月6日(月) プサン・フィルハーモニー交響楽団(韓国) 19:00開演(詳細下記へ問合せください)

問合せ [社]日本オーケストラ連盟 03-5610-7275

第18回中国文化の日 **漳州指遣い人形劇**



50cmほどの人形が実際の間人ながらに喜怒哀楽を演じ、皿回しや宙返りなどの曲芸、キレのある立ち回りなどを披露! 伝統的でコミカルな演目「大名府」の他、子供から大人まで楽しんでいただけるプログラムを予定

▶公演:2008年10月17日(金) 19:00 ~
18日(土) 15:30 ~ & 19:00 ~
19日(日) 15:30 ~

*開場:各回30分前 上演時間約60分

於:日中友好会館地下1階大ホール

参加券1,000(全席指定) 当日:¥1,200(空席がある場合のみ)
チケットぴあ Tel.0570-02-9999(Pコード388-205)

▶漳州指遣い人形劇・関連展覧会

ひとつひとつ手作りされた指遣い人形。伝統的演目から現代の演目まで、劇団選りすぐりの人形達。役柄によって違う豊かな表情、衣装の数々…、生き生きとした人形の世界が広がる。

2008年10月1日(水) ~ 26日(日) (火曜日休館)
於:日中友好会館美術館 ●無料
10:00 ~ 17:00(10月17日、18日は21:00まで)

問合せ:財団法人日中友好会館 文化事業部

☎:03-3815-5085 FAX:03-5811-5263

▶「中国文化の日」同時開催イベント

京劇青少年劇場2008 ミニバージョン

孫悟空の軽やかな立ち回りや集団の激しい立ち回りに乞うご期待! 劇場とはひと味違った興奮に出会える!

2008年10月12日(日)
14:00 ~ / 16:30 ~

会場:日中友好会館大ホール
<http://www.jcfc.or.jp/outline/access.html>

入場料:前売券1,000円、
当日券1,200円(全席自由)

出演:北京京劇院訪日団
演目:「西遊記~無底洞の巻」

主催および申込先:京劇公演事務局

☎03-5281-8067

*日中友好会館では窓口販売のみ取扱い中
(月~金 9:00 ~ 17:30 ☎03-3815-5085)

日中友好会館までの交通

①都営大江戸線・飯田橋C3出口より徒歩約1分/②JR、地下鉄・飯田橋駅より徒歩7分③丸ノ内線・後楽園駅より徒歩10分
(〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3)



使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついでに折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

【9月の定例会&おたより発送予定日】

- 定例会:9月19日(金) 13:30 ~ 田井宅
 - おたより10月号の発送 9月30日(火) 13:30 ~
- ・定例会やおたより発送作業は、日頃なかなか顔をあわせられない「わんりい」メンバーたちの交流の場です。会員はどなたでも参加できます。

第11回「全日中展」準大賞受賞記念

満柏と家族たちの花の墨彩画展

満柏とその家族たち・母、姉そして妻による華やかな中国絵画の系列

2008年9月24日(水)～28日(日)

9:00(初日12:00)～18:00

於：相模大野ギャラリー 相模原市相模大野4-5-1-201
伊勢丹ならびの2階 ☎042-744-6639

http://www.sagamiharashi-toshiseibi.com/dispdinfo.asp?prm=&M_ID=4&C_ID=3

●展覧会についての問合せ：042-757-9518 満柏

第11回「全日中展」(日中書画芸術大展)

全日本47都道府県、全中国31省市特区からの書画作品の集中展示、無宗派の書画芸術大交流(水墨画及び関連芸術・篆刻 書道 日本画 岩彩 水彩など)

8月26日(火)～8月31日(日) 10:00～17:00(最終日15:00まで)

於：埼玉会館 展示室：第1・2・3

さいたま市浦和区高砂3-1-4/JR京浜東北線「浦和」駅西口直進5分

<http://www.saf.or.jp/saitama/guide/access.html>

主催：総合水墨画会/(財)日中協会

後援：外務省 文化庁 中国大使館文化部 国連広報センター
朝日新聞社 東京新聞社 NHKなど多数

問合せ：総合水墨画会 ☎048-259-0171

相模原国際交流ラウンジ

「HOT & SPICY 料理大会」

～世界の食の多様性を感じてみよう！～

2008年9月15日(祭日)

(1) 10:00～12:00 料理交流会

*参加費：500円 定員：30人 (要申込)

中国・韓国・タイ・ベトナム・ケニアの、日本語の堪能な現地の奥さんたちが指導 マーボー豆腐、トッポギ、グリーンカレー、トムヤンクン、トマトと牛肉のシチューとウガリ(ケニア料理)など

(2) 12:00～15:00 会食&交流

*自由参加 参加費300円、子供100円

申込：相模原国際交流ラウンジ ☎：042-750-4150

ラオス+日本人形劇ユニット「チェオボン」

「ぼくらの森には」(2008年版)

ぼくらの森では、いつでも不思議なことばかり起こっている…。ようこそ、不思議な住人がたくさん住んでいる森へ。

2008年10月11日(土) 15:00～&19:00～

於：ひとみ座スタジオ (<http://hitomiza.jp/img/tizu.gif>)

(〒211-0035 川崎市中原区井田3-10-31)

東横線元住吉下車・徒歩20分バスの便あり

企画制作：(財)現代人形劇センター・おおき企画

問合せ：044-777-2228 担当：塚田/守重

お陰さまで15年'まちだ地域国際交流協会'

参加費：全て無料

2008年10月19日(日) 12:30～17:30

於：町田市民フォーラム 3Fホール

<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/com/com14/>

①記念講演会=13:00～14:30

「私から見た不思議な日本語」

講師：莫邦富氏(ジャーナリスト)

②音楽演奏=14:45～15:45

演奏：アロハダイアモンズ

ブルーハワイ、さんご礁のかなた、アロハ・オエなど

③茶話会=16:00～17:30

主催：まちだ地域国際交流協会(MIFA)

後援：町田市社会福祉協議会

*'わんりい'で申込み受付中(ファックス又はメールで)

FAX: 042-734-5100 'わんりい'

中国大陸に育まれた、兄弟オペラ歌手

崔宗順(バス) & 崔宗宝(バリトン)

チャリティコンサート

収益金の一部を中国四川大地震と日本岩手・宮城地震の被災地へ

2008年10月13日(月) 19:00開演

於：海老名市文化会館(<http://www.ebican.jp/>)小ホール

小田急小田原線・相鉄線「海老名駅」西口より徒歩5分

問合せ：崔宗宝音楽事務所 ☎046-232-6065

<http://lbn.cc/sai-soho/html/concert.html>

和光大学総合文化研究所

〈2008年度公開シンポジウムと写真展〉

日本・インドネシア交流の過去・現在・未来

●両国の国交正常化50周年記念シンポジウム

【第1回:日本・インドネシアにおけるエネルギー問題の歴史と現在】

▲2008年10月18日(土) 13:00～15:30

▲於：和光大学 J-301教室

【第2回:日本・インドネシアの人的交流の現代的課題と未来】

▲2008年10月25日(土) 11:00～15:30

〔映画上映とその解説を含む〕

▲於：和光大学 J-301教室

上映映画「マス・エンダン」

2007年夏、溺れた女子中学生を助けようとして、自らは水死したインドネシア人漁業研修生マス・エンダンを追う/映画解説：井上実由紀(元バンドン日本人学校教師)

●写真展示会

多様な価値観を内包するインドネシアを紹介する

「インドネシア、この10年」

インドネシア人が自国を撮影の写真展

▲2008年10月18日(土)～25日(土) 9:00～17:00

▲和光大学附属梅根記念図書館内 梅根記念室

問合せ：和光大学総合文化研究所 ☎044-989-7497

◆各催しの詳細及び会場地図などは、'わんりい' HPでご覧ください。